

旅の跡 The past of
the glory

鯨(しやちほこ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここに一冊の本があります。開いてみると、最初には何も書かれていません。タイトルも、目次も、真っ白です。

さらにもう一ページめくってみると、今度はちゃんと文字が並んで待っていました。それは次のように書かれています。

今回の物語は、旅だった。

目的も、やりたい事もない終わりのない旅。正直に言って、途中から帰れるのか心配になった時もある。でも退屈はしなかった。場所も違えば、人も違う。そうなれば、決まりや、考え方なんて180度変わってくる。そこには個性があった。

出会った。知った。

喜びと悲劇と理不尽と可能性の交錯を。

読んでみるに、それは導入部分とわかります。証拠に、次のページからはタイトルと長い文章が並んでいます。

そこには、とある2人の長い長い旅の物語がありました。

目次

	人の痛みがわかる国	I see Y
	o u .	
	多数決の国	Oursel fish
	レールの上の三人の男	On the
	R a i l s	25
41	コロシウム	Avengers

人の痛みがわかる国 | I see You. |

緑の海の中に、茶色の線がのびていた。

それは土を簡単に固めただけの道で、西へ向かってまっすぐ走っていた。辺り一面には脚を覆うほどの高さの草が、風の通り抜けるさまを示すように、緩やかに波打っている。近くにも遠くにも、木は一本も見えない。

道の真ん中を二台のモトラド（注・二輪車。空を飛ばない物だけを指す）が走っていた。後部にあるキャリアには、両方とも鞆がくりつけてあるが、片方には鞆のしたに剣のような物が置かれていた。

二台のモトラドはエンジン音を響かせて道の通りにかんりのスピードで走っているが、たまに小石を踏んでバランスが崩れる度に運転手がハンドルを切り、進路の修正をした。

運転手の体軀は二人とも若い青年のようで、黒い髪の青年は黒いパーカーをたなびかせて、ベルトにはハンド・パスエイダー（注・パスエイダーは銃器。この場合は拳銃）のホルスターをつけている。後ろに剣のあるモトラドに乗っている青年の髪は黄色く、黄土色のジャケットを着ていた。そして腰のベルトには二丁のハンド・パス

エイダーのホルスターが二つあり、フルオート式トリボルバーが入っていた。顔には二人とも同じようなゴーグルがあり、風から視界を守っていた。

「なあ、射抜！もう少し速度をもう少し落とさないかい!? もう次の町は見えてるんだよ!?」

黄色い青年がモトラドのエンジン音に負けじと声を張り上げる。

「別にいいだろ、流夜！この次の町が見えるときが一番長く感じるんだよ!!? 近くて遠いってやつだ!!?」

射抜と呼ばれた黒髪の青年が同じように声を張り上げて答える。

その瞬間、いきなり地面にある段差から弾かれ、射抜のモトラドがちよつとだけ宙に浮く。これにはたまらず少しだけ速度を落とした。流夜もやれやれと言った感じて速度を落とし、口を開く。

「まったく。旅の途中に大怪我しても治せないよ? この町にも入れてもらえるかわからないんだからね?」

「悪かったって。でも、おかげでもう目の前だ。」

悪びれた様子もなく射抜が答え、もう大きくなつた城壁を見上げる。城壁の周りには堀があり、少し回り込むと跳ね上げ式の橋があった。射抜と流夜はその手前にある小さな小屋に目をつけ、モトラドから降り、中に入る。

その建物の中には誰にもいなかった。

代わりに大きな自動販売機のような機械が置いてあり、それは二人が入ると同時に作動し、幾つかの簡単な質問をし、あっさりと入国許可を出してしまった。橋が降りる。

「随分とハイテクなんだな。機械で判断するなんて少し危ない気もするが。」

小屋から出て、素直な感想を射抜が口にする。

「町に入っても、誰もいなかったりしてねー。」

流夜がからかうような感じで言った。

そして、そのとおりになった。

射抜と流夜が街に入ると、そこには誰もいなかった。町は立派で、よく整備されていた。

「これは…あれか？文明が発展しすぎて人が消えて機械だけ残ったとかそんな感じか？」

流夜の言った通りになって少し驚く射抜。

「うーん、変だねえ、それにしても店ばっかりだ。もしかしたら住んでる場所は固められてるのかもよ？」

辺りを見回して流夜が言う。それもそうか。と射抜が歩を進めようとした瞬間車が走って来て、中からまた四角い機械が出て来て入国歓迎の挨拶を述べた後、町の地図を

渡して来た。射抜と流夜の二枚を受け取ると、車はすぐに何処かに走って消えた。地図に目を通すと、この辺は『東ゲート・シヨツピング街』と書かれていた。

とりあはず近くの燃料ステーションでモトラドの燃料補給をしに行くと、やっぱり誰もいなかった。整備を機械がしてくれるそうだから、ここは任せてレストランで食事を取ることにした。どれもタダ同然の安さだった。

日もくれてホテルを探し、行ってみると、やっぱり誰もいなかった。そして当然の如く機械があり、全ての仕事をテキパキとこなしていく。値段もやはり安かった。

機械に案内されて部屋に行くと、ハンパなく豪華な部屋だった。洗濯サービスもしてくれそうなので、二人は風呂の後に着る寝巻きと今着ている服以外を出した。明日の朝には終わるそうだ。

風呂からあがり、明日の予定を考えるべく地図を最大まで絨毯の上に広げて見る。町の中央に『中枢・政治エリア』と書かれていて、その南に湖があり、はずれの北に『工場・研究所』があつて、それら以外は全て『居住エリア』だった。

「人がいるな。」

当然のように書かれている地図を見て、呆気なく感じる。

「これだけの機械を作つて全てきちんと作動してるもんね、誰かいないとおかしいよ。この前みたいに一人しか残つてない。つてことはないといいいけど。」

「なんで外に出ないんだ？」

「それはわからないけど……やっぱ人に聞くしかないね。『工場・研究所』にも行ってみたいけど居住エリアに行こう。」

「決まりだな。」

二人は頷くと、それぞれのベッドに寝転がる。布団はフカフカで、すぐに眠ってしまった。

朝になって居住エリアにモトラドを押し歩いて歩いて行ってみた。が、結果から言ってみれば一人として出会うことは無かった。ただ、いないと言うわけでは無かった。大半どころか全ての人間が二人を見かけた瞬間家の中に消えていった。

「一体なんだってんだよ？ コミュ障か？」

徐々に射抜の機嫌が悪くなっていく。

「そうだとしたら国中の人が障害だよ。病気じゃあるまいし。それに、皆がみんな一人暮らしになつて原因がわからないよ。」

流夜が憶測を立てると納得がいかないのか射抜はうなだれてしまった。

それから『工場・研究所』エリアまでモトラドで飛ばして、全自動制御の工場を見て回った。丁寧に説明してくれたガイドは、やはり機械だった。

結局その日は元のホテルまでわざわざ戻り、一泊した。

次の日、食料、弾薬、燃料を補給すると西のゲートへ向かった。居住エリアにモトラドの騒音が響くが、どうせ人は会おうとしないなら別にいいかと考えた。そのうち森に入り、森の中を走っていると丘に出て、横を見ると町が一望できた。が、すぐに通り過ぎた。

「お。」

もうすぐ西のゲートというところで、射抜が道沿いのベンチに腰をかけている男を見た。モトラドのエンジンを切り、ゆっくりと近づく。男はヘッドフォンをしていてこちらの様子に気がついてない様子だ。

「ここまで来ると、かなり珍しい生き物に感じるね。他の国では考えられない。」
流夜がまるで珍獣を見つけたかのような言い方をする。

男は三十歳後半の黒縁の眼鏡をかけた男だった。

目の前まで気がつくくと男は喜んだ様子でヘッドフォンを取り飛び跳ねた。

「やっぱり!!? 僕の予想は当たってたんだ!!?」

「なあ、全く話が見えないんだが。なんでこの町の奴らは誰も外に出ないんだ?」

男が歓喜の声を上げたが、射抜が聞いてないかのように間髪入れずに聞いた。

「すまないね、つい嬉しくて叫んでしまった。そうだなあ、君たちは誰かから言われたり

自分で思ったたりしなかったかい？【あの人の気持ちだが、考えが分かればいいのに。】つて。」

「あるある!!?」

流夜がモトラドから身を乗り出して言った。射抜は手を強く握って軽く俯いた。

「二人ともちようどいいや、いまから僕の家に来なよ。歓迎するよ。」

男はすぐ横の家に入って行き、玄関から身を乗り出して手招きをした。二人もモトラドを停めて入っていく。

家に入ると、明るくて広い部屋に案内された。しゃれた造りの木の椅子とテーブル。綺麗に縁取られた窓の向こうには木が綺麗に配置されていて、木漏れ日を作っていた。地面にはあちらこちらで花が咲いている。

射抜は無駄に緊張して椅子に座り、流夜は辺りを見回した後、すんなり椅子に腰掛けた。

「どうぞ。何のお茶かわかるかい？庭で採れた植物で作ったお茶なんだけど。」

男がマグカップをテーブルに置いた。

二人は顔を見合わせて話し合う。

「麦茶?」

「違うと思うよ、香りも色も違う気がするし。緑茶ってわけでもなさそうだね。」

「じゃあなんだ？烏龍茶？」

「庭からは取れないんじゃないかなあ。よく知らないけど。」

「あとは…」

「カモミールティー？」

二人がハモると、男は声を高くして笑い声を上げた。

「いや、すまない。あまりに面白かったから。これはドクダミ茶って言うのさ。知らないかい？」

男は目尻を拭くと向かいの席に腰掛けて言った。

「ああ、なるほど。」

また二人がハモると、男は同じように笑った。

「いろんな茶を知ってるんだね。君たちが言った中には僕にも知らないのがあったよ。旅人と話すところ言った違いが見えて面白いね。前の旅人はドクダミ茶のことを毒があると思うって最初心配して確認して来たよ。」

「そろそろいいですか？この町で人が外に出ない理由を。」

流夜が尋ねる。

「いいよ。さつき聞いただろ？人の気持ちりが分かれば…ってね。この国は、元々機械が仕事をして僕ら人間はやるのが無かったのさ。食べ物も豊富でなにをするにしても

資料に困らないような。そこで皆は暇を色々な事に挑戦するところで埋めていった。科学研究、音楽、文学…あるとき脳研究の医者グループが画期的な発明をしたのさ。簡単に言えば、テレパシーができるようになる薬さ。皆はより互いを分かり合えると言つて飲んだ。どうなったかわかるかい？」

男のパスを流夜が受け取る。

「知りたく無いところを知つてしまい、知られたく無いところを知られてしまった。それで本当に本当の、想像なんかじゃないストレートな対人恐怖症になった。かな？」

男は一瞬驚いた表情を浮かべ、すぐに嬉しそうな表情になった。話が続く。

「その通りだよ。それと全く同じことを前に来た旅人に説明したなあ。懐かしい。そう、一週間ほどは国中でパニックさ。そして僕らは自分や他人の考えが分かるという恐ろしさに気がついた。さらにその解決方法は遠く離れるしか無かった。治療薬を作るにしても、制作班が成り立ってないからね。この国ではこここの数十年の間子供が生まれていない。そのうちに滅びるだろうね。」

男は思い出したかのように立ち上がると後ろにある機会のスイッチを入れた。すると曲が流れ出した。電子フィデルが奏でる穏やかな曲だった。

「いい曲だな。」

しばらくして射抜が言った。流夜は目を瞑つて聞いている。

「だろう？前の旅人もそう言っていたよ。僕はこの曲が一番好きだ。前にここで流行った曲なんだけどね、彼女もいい曲だと言ってくれたけど、本当のところはわからない。実際のところ、君たちがどう思ってるのかももうわかりたくないけどね。」

そして、男も目を閉じ、射抜も続くように閉じた。

曲が終わる。

「じゃあ、二人とも、道中気をつけて。」

家のガレージの前で男が言った。二人ともモトラドにまたがり、いつでも出発できる状態だった。

「いっそのこと、お前も旅に出たらどうだ？そもそも、生きてる人間全てとうまくいこうなんて考えてるからそうなるんだよ。んなもん捨てて、どっかいつてみるよ。何かが変わるかもよ？」

射抜がふと思ったことを口にする。その通りだが、男は顔を横に振った。

「僕はもうこの国で生きて行くよ。もう楽しみを見つけたからね。それに、その点君たちはバツチりだね。何回もハモってたじゃないか。」

男が言うとうと射抜と流夜は顔を見合わせて

「まあな！」

「まあね！」

少しズレたが、ハモった。

「それじゃ、さよなら。」

男が寂しげに言う。

が、二人ともキョトンとして今度は射抜と流夜が大声で笑った。そして男がキョトンとし、一緒に笑った。

「じゃあな!!？」

射抜が言うのと、二人合わせてエンジンをかけ、西ゲートに向かう。

「それじゃあ、さよならー!!？」

男は今度は手を口に当て笑顔で言い、手を振った。

すると射抜がモトラドをフラフラと運転させながら、振り返って手を振った。

「じゃあな!!？」

少し遅れて最後の言葉が男の耳に届いた。

多数決の国 | Ourselfish |

草の絨毯が、果てしなくどこまでも続いていった。緑の大地が緩やかにうねり、幾重にも重なりながら地平線の向こうへと消えていく。

空ははつきりと蒼く、高い。ところどころに眩しいほど鮮やかな雲が流れている。遙か遠く地平線の空では、巻立つ入道雲が白亜の神殿のようにそびえ立っている。蟬が激しく鳴く声が囲むように聞こえて来る。

その草原には一本だけ道があった。

それはわずかに土が見えることで、かろうじて分かるほど細い道だった。まっすぐ進んでは、ところどころに群生している木々をよけるように、たまに急カーブを繰り返している。そして西へと続いていった。

二台のモトラド（注：二輪車。空を飛ばない物だけを指す）が、その道を走っていた。モトラドはカーブをかなりのスピードで抜いて行った。長い直線に入ると、さらにスピードを上げ加速して行く。

荷台に鞆がくくりつけてある方の運転手は、黒髪で黒い長袖のパーカーを着ていた。前は留めてないせいで、風で大きくなびている。ベルトにはハンド・パースエィ

ダー（注・パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）のホルスターがあり、中には細身のハンド・パースエイダーが入っている。

もう一台の荷台に正方形の変形ギミックのついた大剣を敷き、その上から鞆をおいてくくりつけてある方の運転手は、黄色い髪で黄土色のコートを来ていて、腰のベルトにはリボルバー型のハンド・パースエイダーとハンドガン型のハンド・パースエイダーのホルスターがついていた。

二人とも同じような黒いゴーグルをつけて、道から外れないように前方を睨みつけている。

ふと、前方にいた黒髪の青年が顔を少し上げ後方の黄色い髪の青年に手で合図して話しかける。

「見えて来たぞ。」

黄色い青年がそれに応える。

「やっとかい。」

「誰がいないの〜?」

黄色い髪の青年が声を上げたが返事がない。

二人の目の前には高い城壁にあいたアーチ状の門があった。しかし本来侵入者を防ぐための分厚い扉は、完全に開いている。奥に石造りの家も見えているが、人がいる様子もない。もちろんだがこの門にも番兵らしき人はいない。

「誰もいないみたいだよ？どうする、射抜？」

黄色い髪の青年が黒髪の青年に尋ねる。

「入ればいいんじゃない？この様子だと拒んでる様子じゃねえし、俺と流夜なら襲われても生き残るだろうよ。」

射抜と呼ばれた黒髪の青年はモトラドの運転でぐしゃぐしゃになった頭をガシガシと掻きながら言う。

二人は門をくぐって国の中へと入って行った。

「街中で野営ってなんだかホームレスみたいだな。」

射抜が焚き火の横で寝っ転がり自嘲気味に言った。辺りは真っ暗で、雲一つない晴天の夜空には星々が邪魔されることなく輝いている。

「それ、言ってる悲しくならないの？」

その横で流夜が座った状態で笑いながら言った。

射抜は苦笑すると表情を戻し空を眺めた。

「にしても、なんでこんな人がいないんだろうな。寂れている様子はねえのに。」

射抜は手足を伸ばすとそのまま力を抜いて大の字になる。

「なんでだろうね？ 街並みはこんなに整備されてるのに、誰もいない。こりやどういふことだろう。」

射抜と流夜が野営しているここは、大きな交差点の真ん中だった。石畳の、車が並んで数台は通れそうなほどの太い道が、綺麗に四方に延びていた。道沿いには石造りの建物が隙間なく並んでいる。全て同じ様式の4階建て、歴史がありそうな立派な建物だった。しかし、どの家からも光は漏れていない。

射抜と流夜は、半日彷徨ったが、誰一人として出会うことはなかった。ちようどよくここが緩やかに窪んでいて、そこに前に誰か来たのか焚き火を焚いた跡があったから適当な木を集めて火をつけて座っている。

「まるでゴーストタウンだな。」

「なにそれ？」

「俺の国の街が昔そうだったみたいなんだよ。大きな戦争に負けてさ。終戦の後様子を
見に来た敵軍長官だっけか？ が言った言葉だよ。」

「へえ。」

二人とも携帯食料をちぎって食べる。栄養しかないそれは、2人の腹を満たしそうになかった。

「明日はどっちに行くんだよ。」

「そうだね、当分は探索かな。まだ行つてない場所は沢山ある。例えば、あそことか。」

流夜の指差した方向を見れば、巨大な城のような建物が建っていた。

「じゃ、今日は寝るよ。おやすみ。」

「おう、おやすみ。」

流夜と射抜が寝袋の中に入る。焚き火はしばらく燃え続けていた。

翌朝。

2人は日が覗く前に起きた。まだ日が差していなかったが、辺りの様子は見えるぐらいいにはなっていた。なっていたが、霧が辺り一面に立ち込めていた。

射抜は軽く運動して、流夜は焚き木の後を綺麗に始末して荷物を整理する。準備ができた頃にはもう霧は晴れて太陽が顔をだしていた。

街中を搜索するが、全く人がいない。昼前、何も進歩が無いことに気が滅入った2人は途中に見つけた公園で休息を取ることにした。

緑の広大な敷地に白い石畳の道が伸びている。モトラドでしばらく走り回っても端

にたどり着けそうに無いほど広い。やはりここにも手がかった様子は無く、木々や芝生は伸び放題、池の水は干からびひび割れ、花壇の花は生えた後すら残っていないかった。休息を終え、公園を進むと白亜の大きな建物を見つけた。

「すげえな、めっちゃくちゃ手がかかっている。何というか、すげえ。」
射抜が関心しきって声を漏らす。

2人は白い大理石で作られた建物の正面にいた。目の前のそれは2人の視界からはみ出るほど大きい。作りはひたすらに豪華で端から端、上から下まで美しい装飾が施されていた。

「元は王宮か何かだろうね。これは相当だ。案内人が今一番生きて来た中で欲しいよ。」

2人はモトラドに乗るのをやめ、押して歩いていった。

これを無視して進むのは勿体無い気がした。

何十枚ものステンドグラスで飾られた巨大なホール、遥かに大きい浴場、果てし無く続く廊下。内装も外装に負けず豪華だった。

一通り見終わった2人は建物の裏に出た。そこはテラスになっていて広大な裏庭が一望できるようになっていた。

「ありやいや…」

流夜がつつい、とといったふうに声を漏らす。

射抜はその光景をみて顔をしかめた。

「墓だった。」

裏庭の芝生の緑の中に、簡単に土を盛り薄い板を一本立てただけの簡単な墓があった。

そして墓は、視界いっぱいには広がる裏庭を、文字通り全てを埋め尽くすように並んでいた。幾千、幾万あるのか、到底数え切れそうに無い。

裏庭が昔なんだったのは知ってる者も掲示板もない。そこに後に残ったのは墓だけしかない。

2人は感嘆深くそれを眺めていた。

「この国の人はどうなった？死んだ？虐殺なら墓なんてないし死体も、ましてや血痕も無いんだ、どうなった？」

空が暮れ始めた頃、射抜が墓を眺めたまま問いかけた。

流夜もそれらから目を離さずに答えた。

「知らないよ。ただ、墓はある。何処かに生き残りがいたはずだ。何処かに旅立ったか、あるいは1人果てたか。どうだろうね。：そろそろ行こうか。もう何も無い。」

西に向かって走って走って明日の朝出発するよ、と言いながらモトラドに乗ってエンジンを

かけた。射抜は何も言わずにそれに続いた。

夜は小さな小屋を借りて過ごした。ゴーストタウンの朝は、他より圧倒的に静かだった。モトラドのエンジン音が周りは覆われていないのに響いて聞こえる。

城壁が見えて来た頃、一台のトラクターが止めてあるのを見つけた。誰もいないだろうと思つて通り過ぎようとしたが人影らしきものが動いたのが見えて止まった。

トラクターの後ろの荷台には野菜や果物が山積みになっていた。運転席には、1人の男が帽子を目深にかぶつて座っていた。三十代ぐらいの男で、土に汚れた作業服を着ていた。

「ありやりや、こりや予想外だなあ……」

流夜が頭を掻きながら呆気にとられたように呟いた。

男が帽子のツバをクイッと上げてこつちを見ると次は思いつき帽子をとつて起き上がった。

「おはよー、今聞きたいことがあるんだけど、大丈夫？」

「旅人か……おおよその事は予想がつく。この国の過去だろう？」

「そのとおりだよ。公園の墓についても。」

「あそこに行つたのなら話はだいたいわかる。

ここは建国以来ずっと王政が続いていた。王一人が国と人を全て我が物として支配してきた。それでも、何十人いた中には立派な政治で国民から慕われていた人もいたが、やっぱりそうでもないロクテナシの方が圧倒的に多かつた。

特に最後の王だつたやつは最低だつたよ。皇太子時代が長かつたせいかわになつた途端自分勝手なことばかりした。逆らう者は一人残らず殺された。当時不作で財政難だつたことなんて全く関係なしに遊んでばかりいた。不作は3年も続き、飢え死にする人は溢れていた。無論、奴は御構い無しさ。

少ししてあまりの生活苦に税率を下げた欲しいと訴えた農民が、全員殺された。我々の怒りは頂点に達した。王による暴力はもう歯止めがきかない。この状況をなんとかするためには、その時の歯車自体を壊すしかない、革命計画が本格的に動き出した。当時俺は、大学院で文学を研究していて、比較的裕福だつたが、貧民の痛みはわかつた。そして俺はその計画にかなり初期段階から参加した。」

「見つからなかつたのか？裏切りは？」

睨みつけるように聞いていた射抜が口を挟んだ。

「裏切りは無かつたよ。それだけ王は人望が無かつたんだろうな。だが、見つかつたやつは死刑さ。この国の伝統的な死刑方法を知っているか？手足を縛つて逆さまに吊る

し、道路に頭から落として殺すのさ。この国では家族も一緒に処刑される。交差点の広場の公開処刑を、何度も見るようになった。まず仲間たちの家族が殺される。親、配偶者、子供の順にな。そんななか、仲間達が俺や他の仲間を群衆から見つけて、目隠しを断つて、落下するほんの刹那に何かを訴えて、そして頭蓋骨を砕かれ、首の骨を折って死んで行くのをみたよ……何度もな。

計画から一年、とうとう俺たちは蜂起した。まず警備隊の武器庫を襲った。無論大量のパスエイダーと弾薬を手に入れるためだ。それ以前は、一般の民衆が武器を持つことが一切許されなかった。当たり前だがな。」

「ろくでもない奴でも知らんぷりをしてるだけで、本当は何をやらかしてるのかわかってる。ただ、今が良ければと思ってるだけで、それで民が武装するのを恐れるから。」
また射抜が口を挟んだ。男はチラツと射抜を見ると頷いて話を続けた。

「そうだ。とにかく、各地から武器を手に入れることは成功した。俺たちに賛同してくれた警備員もいた。そして後は一気に王宮に突入し王を捕まえる、筈だった。だがやめた。」

「はあ？なんでだ？」

射抜が素つ頓狂な声をあげる。

「逃げたんでしょ？武器庫を襲うなんてでかい出来事、王に届かないわけじゃないもの。」

すぐに流夜があたりまえだと言わんばかりに発する。

「ご明察。王は家族……と言うか財産と共にトラツクの荷台に隠れて国外に逃げようとした。まあ、案の定野菜と宝石に埋れたやつなんて誰だって怪しむに決まってる。そして革命は犠牲を出さずにあっけなく終わった。」

「で、それからどうなったんだ？ 民主制？」

射抜が間髪入れずに問う。

「その通り。多数決で決めることになった。最初は王の処罰について。親族以外皆死刑に賛成して決まった。例の方法でね。死刑が執行された瞬間、恐怖と絶望の時代が終わった気がしたよ。それからは皆で新しい法律を作った。あの時は楽しかったよ。皆で集まっていろいろ決めた。」

感慨深そうに男は目を閉じ頷いた。

流夜が「それはまあ、極端な……」と、呟いた瞬間男が目を開けて話を続けた。

「そう、極端なんだ。ある時、多数決だと手間がかかるからリーダーを決めて運営を任せようと言いだす輩が現れた。王政が復活するのと同然なそんな提案は反対されたよ。そしてそんな奴らは今後国に危険だからと言って全員死刑も多数決で決まった。他にもこんなことは続いたさ。死刑制度撤廃、税金軽減……そこで足りなくなつたものがあ

る。」

「墓場か。」

射抜が答えた。

「そう。元王宮が中央公園になり、農地にする予定の裏庭を使うことにした。これも反対にするやつは死刑になったよ。死刑が行われたのは新政府になってからは一万三千六十四だ。」

「それで、最後の一回は？」

「ちよつと数年前の年さ。その時は俺と妻、そして昔からの親友だけ残っていた。その親友は国から出て行くと言い出したのさ。国を捨て、義務を捨てる奴は許せなかった。2体1で死刑が決まった。妻は、そのすぐ後に病気で亡くなった。医者もいないこの国ではどうすることもできなかつた……。」

男は涙をこらえるように遠くをみた。少なくとも後悔してゐるようには見えなかつた。

「……ちよつと前にな、旅人が来たんだ。俺はそこで考えを改める必要があつた事に気がついた。恥ずかしいことに、それまでずつと今までが正しいと思つてたんだよ。だから、いろんな見方を知る為に、旅をすることにした。幸い、売れるものはいっぱいあるし、銃器もある。そうだ、なにか旅に必要な心得とかあるか？」

男が二人に問いかけた。笑顔を向けてるが、裏には不安が見える。

「殺すことに抵抗を持たないことかな。」

「生死を分かつ時にプライドを捨てること。」

二人はさすがに言った。男は笑ってエンジンに火をつけた。

「いい旅になるといいね。」

流夜が笑顔を向けながら言う。男はフツと笑って先に門に向かって国からでた。

「…次はどの道を行く？」

流夜が車が去った方向を見ながら言う。

「次はお前の番だぞ。お前が決めてくれ。」

射抜も同じように顔を動かさずに言った。

「これはなんだろう？交代制王政？」

流夜がモトラドに乗り、ゴーグルをつけながら言う。

「ハッ、そんなものすぐに権力争いだろ。信頼だ。」

軽く笑いながら射抜も同じようにしてゴーグルを付ける。

「じゃ、行こうか。何処かに。」

レールの上の三人の男 —On the Rails—

そこは巨木の森だった。

切り株がダブルベッドになりそうなほど太い木々が、まるで神殿の柱のように、しかしこれといった法則性はなく点々と立ち並んでいた。

見上げると緑で一面染まっている。地上二十五メートルほどから始まる枝と葉が、隙間なく空を埋め尽くしてしまっている。かすかにしか日が当たらないため、地面にはまった草が生えていない。黒く湿った土が、どこまでも続いているだけ。そこは黒と緑に挟まれた、自然が作り出した不自然な空間だった。

「俺は森の中を走るのはあんまり好きじゃないな。なんでかわかるかい?、射抜」

巨木に手を当てて立つ成人になるちよつと前らへんの青年が言った。

黄土色のコートを着て黄色い髪を持った青年は、腰の両側にそれぞれ右と左にホルスターがありその中にハンド・パースエイダー（注・パースエイダーは銃器。この場合は拳銃）が入っていた。

横に停めてあるモトラド（注・二輪車。空を飛ばない物だけを指す）には、ハンドルに黒い縁の大きいゴーグルが無造作にかけられていて、荷台には四角形に折りたたためら

れた大剣の上に鞆が置いてあり、上からロープでくくりつけられていた。

「ん、木に何度もぶつかりそうになるとかかか?、流夜」

少し前方に射抜と呼ばれた年は同じぐらいの黒髪の青年が、モトラドに逆向きに座り荷台にくくりつけられた鞆に手を組みもたれながら返した。

「違うよ。お前じゃないんだから。正解は、森の中だと進むべき方を簡単に間違えやすいからさ。北に進んでいりつもりで、東を向いてることもある。なにせ、太陽が見えないからね」

流夜と呼ばれた黄色い髪の青年は、そう言いながらゴーグルをとってつけ、モトラドに跨った。射抜も本来の座り方に座る。

「進むべき方角ねえ、難しいことを考えるなあ」

「そうなんだ。俺たちは真北に行けば、この森は終わる。そうすれば道に出る、ハズだ」
「ハズだね」

流夜はスタンドを外す前に胸ポケットからコンパスを取り出して北を確認した。

「それじゃ、行こう」

二人は前に体重をかけ、スタンドを外し、同時にクラッチを切る。少し走りながらブレーキの利きを確かめて、スピードをあげていく。

そしてそれほど走らずに止まった。流夜はモトラドに跨ったままコンパスを取り出

し、北を確認した。

そして発進させて、止まって、確認する。流夜は同じことを何度も繰り返した。

「ええい、面倒くさい」

流夜はいつまでたっても終わりそうにない森に文句を言いつつもしっかりと確認作業を続けた。

「お疲れ」

百回ぐらいの方角確認を終えて走り出すと、進行方向の緑と黒の間に、白線が混ざった。やがてそれは上下に広がって、明るい帯になった。

二人はスピードを緩ながら進み、明るさに目が慣れた頃、最後の一本の脇を通り過ぎて、2台のモトラドは巨木の森を抜けた。

森の北側の終わりに、道は無かった。二人の前には、うっそうと茂るジャングルしか見えなかった。

「道がないけど、間違えた？」

射拔が呟いた。

「いいや、これでいい。足元を見てみて」

茂る草の間に、何か細くて赤茶けた線が見えた。少し離れてもう一本あった。平行に並んでいるそれは、

「おお、レールじゃん！」

「そのとおり。」

流夜はモトラドを押しして一本目を超えてモトラドを二本目のレールの間に入れて西を向いた。射抜は一本目に入れて同じく西を向いた。

「道を教えてくれた人が言つてたんだ。『モトラドなら行けると思うよ、細いけどしっかりした道に出るから』つていうのはこれのことだったんだろうね」

「汽車が通つたりは…なさそうだな」

疑問は投げる前に、さびさびのレールの上に落ちた。

よく見ると線路に沿つて同じ草が生えていて、まるでジャングルの中に緑色の道があるようだった。

「これはいいな。少なくとも、『進むべき道』は、間違える心配はないな」

「そうだね、でも、『進むべき方角』だよ」

流夜は頷きながらエルメスを発信させた。あちゃー、と声を出した射抜も続いて発信させる。レールに前輪が弾かれないように、それだけを注意して走る。あまりスピードは上げられなかった。

レールの上になでたくましく伸びる草を踏み潰しながら、二人は走り続けた。

そして太陽が一番高く登る頃、一人目の男に出会った。最初に気がついたのは、射抜

だった。

ジャングルの中の緩やかなカーブを抜けた途端、射抜が、

「あれ人じゃね？」

短くそう言った。

流夜も延々と続く曲線の道の先に人影を見つけて、ブレーキをかけた。

二人とも何も言わず近づいて行くと、男が一人、しゃがんで何かをしていた。彼は一瞬だけ顔を上げた。彼の後ろには、汽車と同じような車輪を持つリヤカーが一台、荷物を満載にして停めてあった。二人は男の少し手前でモトラドを止めた。エンジンを切り、降りる。

「こんにちはー。」

射抜が挨拶をして、男は立ち上がった。

背の高い老人だった。堀の深い顔をしていたが顔中シワだらけで、小さなグレーの目を持っていた。

白髪がほとんどの髪は長く、髭も伸び放題だった。黒い帽子はボロボロで、ところどころがシミのように色褪せていた。服は同じく黒で、しかしボロボロであちらこちらにツギハギがあった。

「やあ。旅人だ」

老人はそれだけ言った。

そして、

「わーお」

周りを確認していた流夜が変な声を上げた。

「おお、マジか」

射抜もソレに気づいて驚愕のあまりかなり大きな声を上げた。

老人はゆっくり振り向いて、二人と同じものを見た。そしてやつぱりかといった風な表情をしてそしてゆっくりと顔を戻して、若者に、何気なく呟いた。

「ああ。わしがやつとるんよ……」

流夜は一瞬、老人を見た。そしてもう一度それを見て呟いた。射抜はレールから目を離さなかった。

「信じられない……」

射抜と流夜の視線の先、レールだった。そしてそこに、あれほど茂っていた草は一本も生えてなく、綺麗に敷き詰められた砂利と、恐ろしいぐらい等間隔で並べられた枕木が見える。

そして二本の鉄は、まるで工場から送られてきたかのようにピカピカだった。太陽の

光を受けて、上も横も金属光沢が鮮やかに浮かび上がっていた。

「悪いが、あのリヤカーは簡単にはどかせられんなあ。すまんが、モトラドをいったんレールからはずしてくれんか？」

「ああ、はい、はい。」

流夜は慌てたように言った。再び頭を下げた老人に近づいて一緒に横に座り込んだ。射抜は、停めたモトラドの上でただ見ていた。

「ひとつ、聞いていい？」

「何かな？わしが答えられることなら」

「全部、草抜いてレール磨いて、全部一人で？」

「ああ、それが仕事なんだな。」

「どのくらい、続けてるの？」

「五十…そろそろ六十になるかな。多分、それくらいじゃ。」

「五十年？その間、ずっとレールを磨いて来たの？」

「ああ、わしは18の時に鉄道会社に入つてな。その時に、今は使つてないレールがあるが、使う機会が出てくるかもしれないという事で、できるだけ磨くように言われたんじゃ。まだ止められてないので、こうして続けとる。」

「国には、まだ？」

「ああ。わたしには妻と子供がいてな。あいつらを何としてでも、食わしていかにやならんのだ。今どうしておるか。わしの給料が出るはずじゃから、生活には困つたらんじやろう。」

話してる間にも、老人は手を休めなかった。射抜が何か言ったが、2人には聞けなかった。

「旅人さんがたは、どこに行かれるんじや?」

老人は、何気なくそう訊ねた。

光り輝くレールの上を、2台のモトラドが走っていた。射抜と流夜は日の出から走り続けている。途中見つけた小川で少し休憩し、水をくんだ。

線路はジャングルの中を、緩やかにうねりながら伸びていた。灰色の砂利が道を作り、二人を導いている。

「昨日の爺さんさままだね」

流夜が今日何度目かの台詞を吐いた。草が取られ、空が映るぐらいに磨き上げられた

レールのおかげで、昨日と比べると走りやすさは圧倒的だった。枕木からくる規則的な振動を楽しみながら、二人は走り続けた。

二人のお腹が空いてくる頃、2人目の男にであった。

最初に気がついたのは、流夜だった。

「おや、また人だ。」

かなり急なカーブを抜けて、流夜が急ブレーキをかけた。射抜もすぐに人とリヤカーがあることに気づき、モトラドを停めた。

「こんにちは〜」

流夜が軽くお辞儀をした。射抜はモトラドの上でまた座っている。

「ああ、こんにちは」

男は老人だった。背は流夜よりやや低く、痩せてひよろつとしていた。ほんの少し口髭を生やしていて、禿げ上がった頭に、帽子をちよこんとのせている。

そして昨日出会った老人に似た、黒い上下お揃いの服をきていた。そして、やはりあちこちにつきはぎが当ててある。

流夜が近づいて何か言おうとした時、気がついた。

「あらら、レールが…」

そうひとりごちた。後ろで射抜がうええ…と変な声を出している。

リヤカーの向こうで、輝くレールがぷつぷり切れていることが分かった。枕木もなく、砂利だけが、ジャングルの先へ消えている。

「ああ、わしが外してゐるんじゃないよ」

流夜の嘆きに、老人が答えた。そして、輝きを失った砂利道を呆然と見ている流夜に、「すまんがのう、リヤカーは退けられないきに。そちらさんでよろしゅう頼む」

そう言つて、先端がほんの少しだけ折れ曲がつている、長い鉄棒を手に取り、荷物が溢れそうな後ろに回り込んだ。

流夜は射抜に指示し、急いでモトラドを外し、横に運ぶと、老人と同じようにリヤカーの後ろに回り込んだ。

老人は片側のレールの下に、鉄棒の先を差し込んだ。そして、

「せいっ」

と、掛け声と共に、棒に体重をかけた。するとレールは外れ、砂利の盛り上がり脇へ、転がつて落ちた。

流夜がよく見ると、その先にも、外れて転がつたレールがあった。それらはジャングルの赤い土にまみれ、輝きは見えなくなつてしまつていた。

「聞きたいことがあるんだけど…」

「なんじゃ」

「レールを外してるのはなんでなの？」

「仕事でのう、一人でずつとやつとるよ。枕木も全部取っ払うきに」

「…ずつとは、何年ほど？」

「50…いや、そろそろ60に入るぐらいかの？正確にはわからんな」

「……………」

「わしは、16のときに鉄道会社に入社して、使つてない線路を、もういらなから取り壊すように命令されて、初仕事じゃき、張り切つてやつとる。まだ止めろと言われてないしのう」

「国にも、帰つてない？」

「ああ。わしには弟が5人いてな。あいつらの食い扶持を稼ぐために休んではおれんて」

「そっか…」

流夜は何も言えなかつた。射抜が何かを呟いたが、やはり届かない。そして流夜は何気無く聞いてみた。

「レール、使つてない割りには綺麗だよな？」

すると老人は、

「ああ、ずつとじゃ。不思議じゃのう。外しやすくして助かつとるがな」

「そう…」

流夜には、やはりこれ以上いえなかった。

「旅人さんがたは、どこに行かれるのかな？」

老人は、静かに尋ねた。

灰色の砂利道を、モトラドが走っていた。

流夜と射抜は日の出から走り続け、休憩はほとんど取らなかった。

道はジャングルの中に比較的まっすぐに線を引いていて、脇には外されたレール、掘り出された枕木、レールを固定していたスパイクが、一定の間隔おきに山積みになっている。

「走りにくいなあ」

「お お」

流夜が今日何度目かのセリフを吐いた。

射抜はガタガタと伝わってくる振動で遊んでいる。

枕木のない砂利道はタイヤのグリップが悪く、カーブでも少し傾けただけで滑った。

二人はスピードの出し過ぎに注意して、神経を使いながらハンドルを握っていた。

三人目は、二人同時に気づいた。

まっすぐ走る砂利道の向こうに、人影が見えた。

流夜がアクセルを戻したから、射抜は何も言わなかった。ゆっくり近づくと、男は二人に気がつき、大きくてを振った。男の手前でエンジンを切り、流夜は降りて、やっぱり射抜は降りずにそのままだれた。

「こんにちは〜」

「おう！旅人さん」

男は立ち上がりながら返事をした。

老人だが、たくましい男だった。上半身裸で、腕にも肩にも筋肉がでていた。顔の皺を見なければ、働き盛りの中年と言った風だ。昨日と一昨日出会った男達と同じ、黒いズボンを履いていた。裾はボロボロになっている。

流夜が話しかけようとしたところで、射抜が後ろで声を上げた。

「レールがある…」

老人の後ろの先に、荷物満載のリヤカーが一台あり、そこからレールが始まって、ジャングルの先に消えていた。

老人は、持っていた巨大なハンマーを担ぎながら、

「おう、俺がやった」

元氣そうにそう言った。

「一人でやってるの？」

流夜が恐る恐る聞いた。

「なあに、慣れりやどうってことない。材料は全部そこにある。」

老人は転がっている枕木とレールとスパイクを指した。

「とてもいや々な予感」

流夜が小声で呟き、尋ねた。

「いつからこれを？」

「ん、かれこれ50と…ちよつとかな？ちと計算は苦手だね。」

「ああ…」

「俺が十五の時かな。鉄道会社に就職したんだ。そしたら、前にあつた線路がひよつとしたらまた使われるかもしれないと言われて、治すように頼まれたんだ。まだ止めろと言われてないしな。」

「国には、やっぱ帰ってない？」

「そうだな。両親が病気でな、働けなくなつたから、俺が三人分稼がないと」

「そう」

流夜が予想通りの回答に、寂しそうな表情をした。

射抜が何か呟いたようだが、二人に届いた様子はない。

「これからも、頑張つてね」

「おうよ。任せとけ」

二人は無言で、エンジンをかけた。

「ところで旅人さん方は、どこへ行かれるんだい？」

老人は、ニヤツとして問いかけた。

続くレールの途中、ただ黙々と導かれている中、流夜が口を開いた。

「射抜。」

「なんだよ」

射抜は雑に返事をした。

「ジャングルの抜けたところに先の国がない限り行かない。あつたとしても、鉄道会社には寄らない。いい？」

「でもさ……」

「ダメだよ。アレがその会社のシステムなんだ。僕らが介入したら、会社が倒れ、もつと大勢が苦しむかもしれない。この方法が間違っていれば誰か探しに来てははずだし、いまの状態が仕方ないんだよ。」

「でも……」

「納得いかない、でしょ？俺もそうだよ。」

「……」

「俺らのやってる事だってそうさ。誰かが『これを行わせるのは危険だ』って言ってあの場所を取り壊されたら大勢どころじゃないってのは、理解できるでしょ？」

「……そうだな」

射抜はもう、何も言わなかった。

流夜もまた、何も言わなかった

コロシウム — Avengers —

森と海の境目に、道はあった。

うっそうとした森が、清流によつてすつぱりと分けられている。堤防の役目を果たしているらしい盛り土が、そのまま道だった。水面よりかなり、森の地面よりやや道は高い位置にある。道の土はかなり硬く、ほとんど平坦にならされていた。幅も広い。普段からたくさんさんの車両の往来があるらしい。しかし今は二代のモトラド（注・二輪車。空を飛ばないものだけを指す。）が、猛スピードで疾走してただけだった。モトラドの運転手は、今まさに地平線から姿を現した眩い太陽を背にしていた。長い影が進行方向に伸びている。

運転手の体軀は健康的で、二人とも体つきもしっかりしていた。一人は馬鹿みたいなスピードを出して先を走っている黒目黒髪の青年。白生地に意味の無いどこかの国の言葉がカッコよさげに並んでいるTシャツの上に黒いパーカー、果てにはその上に黒のジャケットを着ていた。二人目に黄色い髪のもた青年。こつちは黄土色のコートを着ている。二人とも共通して黒いゴーグルをつけている。

森の朝の湿った空気が、遠慮なく二人の顔をたたいてゆく。

「いい道だね、射抜！だけど、ちよいとスピード出しすぎなんじゃないかな！」
後ろを走る黄色い髪の青年が叫んだ。

「何言ってるんだ流夜！こない道、トばさないほうがもったいないだろ！」

そう叫び返した射抜と呼ばれた黒髪の男は、アクセルを全く緩めなかった。ギアはトップに入ったまま。二人のモトラドのエンジン音はマフラーを落としたかと思うくらいうるさく、振動も、どこか壊れてるのかと疑うほど激しい。

モトラドには二つとも後部座席はなく、キャリアになっていた。流夜と呼ばれた男のモトラドのキャリアには斧のような物の上に大きなカバンが置いてあり、その上からまとめてロープで括り付けられている。射抜のキャリアには大きなカバンが括り付けられていて、両脇にはさらに荷物を積むための箱が取り付けられ、重裝備になっている。それらすべてが、猛スピードの中でびびしがたがた揺れていた。

道がほんの少し緩やかに盛り上がっていた。射抜はスピードを落とさずにそこに突っ込み、モトラドを跳ねさせ、流夜は道の盛り上がり気づき、スピードを落として避ける。

鉄の塊が浮いて、数メートル空中を進み、ばきや！と着地した。

「ふうふうふうふう！」

射抜は楽しそうな声を上げ、着地した後、ここでやっとアクセルを緩めた。先ほどの

半分ほどに落として流夜と並ぶと、興奮が収まらない様子で言った。

「いやあ、楽しかった!」

符解が呆れたように答えた。

「素直なのはいいけど、そんなことしてるとすぐに壊れちゃうよ?」

二人はギアを落とした。

「大丈夫だつて。モトラドは壊れても出せるからいいつて」

「射抜。無い世界で、あまり使ったらだめだよ」

流夜は、まじめな表情で射抜を声で制した。

「それくらいいいだろ、符解みたいなこと言うなあ」

流夜は、やれやれといった風のため息をついて首を振った。

「おし、じゃあ次の国だ」

射抜が右手で前を示すと、前にはなだらかな下り坂になり、その先に城壁が見えてきた。そこは浅い盆地になっていて、濃紺な森の中にグレーの壁がぐるりと町を取り囲んでいた。中には建物が乱立し、中央には巨大な楕円が見える。

「今回の旅始まって以来の問題だね」

流夜は心底楽しそうな表情で言った。

射抜はあまり気が進まないといった感じで、

「マジかよ・・・」

そう呟いた。

「ああ・・・やっぱりね」

流夜は言葉とは反面、やっぱり楽しそうな声で言った。

「お前も物好きだなあ。言っちゃ悪いが、中の連中並みに狂ってるぞ」

中年の門番は驚きと呆れの両方を顔に出している。

さつき二人が入国した時の話はこうだ。

ある日国の王が変わってからコロシウムが開催されるようになった。

ここに来た人間は強制的にそのコロシウムに強制参加させられていた。

コロシウムとはその名の通りで、入国希望者全員でトーナメントを組み、相手を殺す、相手が動かなくなる、相手の降参を受け入れることで勝ち、すべて勝ち抜いたら優勝、国ができる範囲なら何でも国が願いを叶えるというものだった。基本的には『これから俺様の住む家がならなくてはならない』などと言った身勝手な欲求をした。

国に入ると強制参加、完全に個人戦で、カップルで来ようものなら引き裂かれ、ルー通りに殺し合いをさせられる。逃げようものなら敵前逃亡犯として殺され、戦いに出なければ奴隷として扱われる。

それが7年間続いたある日、国が変わる、もっと酷くなる事件が起きた。

その日はとある旅人が二人来ていた。

一人はハンド・パスエイダー（注・パスエイダーは銃器。この場合は拳銃）を二丁もった少女で、もう一人は刀を持った青年だった。

二人は別々に入国し、ロシアムを勝ち抜くうえで犠牲者を一人も出さずに勝ち進むという前代未聞の偉業をなして決勝まで進み当たった。

結果的に言つて、勝つたのは少女だった。少女は青年の喉に銃を突き付けるところまで行つた。その状態がしばらく続いた。周りからは『殺せ!』の大合唱は始まつていた。

そして少女は何かを叫ぶと、青年が膝を折つて、同時に少女のハンドパスエイダーからは弾を改造したのかありえない威力を持つた弾丸が放たれ、しゃがんだ青年の頭上を超えた。

弾丸はそのまま進み、王様の貴賓席に向かつた。

貴賓席はそこまで厚くないガラスで覆われていた。少女が放つた弾丸はガラスを貫き、王様の頭を打ちぬいた。そして両手を開き、また叫んだ。

『皆さん! 残念ながら王様は流れ弾でお亡くなりになつた! お悔やみを申し上げる! そしてボクは勝負に勝つた! ボクは市民になつた! 勝利者の権利であるボクの新しいルールを言おう! 王がいなくては国がまとまらない! したがつて新しい王を決めたいと思う! 今からこの国にいるみんな、国中で勝負をしよう! そして、最後に勝ち残つた一人が新しい王だ! 戦わないものは、国を去つた時点で市民権を剥奪する! これが新しいルールだ!』と。

それから国内で内戦が巻き起こった。いつしか勢力は二つに分かれ、いまなお続いて、最後まで残った少女と青年は、すぐに国を出たという。この門番は、最後に少女に忠告を受け、国を出ようとしたが、旅人がこれ以上入ってこないように門番を続けているらしい。それでも旅人が通るようだが、帰ってこないことがほとんどだとか。

「それで、国の外ではどれぐらい知られているんだ？」

中年の門番はため息をつきながら尋ねてきた。

「俺たちが来た方向に坂があるんだけど、そこから観測されたいよ。多分逃げてきた人が言ったんじゃないかな。」

流夜の言葉を聞いて、門番は安心した表情で「そうか・・・」と小さく呟いた。

「じゃ、行くよ、射抜」

「お前マジかよ・・・」

門を越えようとする流夜に、射抜はまた同じセリフを投げた。が、今度は嫌そうな声ではなく、話が話の後で素直に驚いたような声だった。

「酷い有様だな」

開口一番、射抜がそう呟いた。

石造りの街並みは流れ弾でほぼ倒壊、道もほぼ役割を果たしてなく、あちらこちらに乾いた血が固まっている。

門番が派閥と言っていた。下つ端らしき人が死体をどこかに運んでいて、指示する人間が絶え間なく大声で何かを言っている。

慣れそうになく、慣れたくない光景を眺めていると、指示を出していた人間がこちらに気づき、近寄ってきた。

「お前ら、旅人か？なら、ここに向かえ。そういう決まりになっている」

その男は、来るなり言葉短く話すと、返事も聞かず地図を渡し、元の場所に戻った。2人は顔を合わせてから地図に目を通すと、方角を示す傾いた記号と、一番下にある唯一の門、明らかに巨大な円形の建物、中央で固まった区切るための二本の線、そして、その上側に×印を確認した。

「まあ、行ってみるか」

「そうだね」

流されるままに、とばかりに射抜が短く呟くと、流夜もすぐに合わせて短く呟いて、

ゆつくりと歩いて行きました。モトラドは、2台とも門の外です。荷物も最小限に、謎の斧と、ハンド・パスエイダー、それに3日分の食料と金だけです。もつとも、乗ってきてなんの役にも立ちそうにないですが。

日が真上に差し掛かるぐらいに、境界線らしき場所、つまり地図の中央あたりに来ました。道中、幾度となく声をかけられましたが、手に持った地図を見ると、すぐに引き返して行きました。中央にくればくるほど、だんだん光景が荒々しくなつて行きました。中央自体は、あまり荒れていませんでした。といっても、被害が薄いだけで、ところどころ砕け散つてはいませんが。

「この向こうなら、寝るところとか大丈夫そうだな」
「そうだな」

流夜が、そんなことを話します。射抜も、合わせて呟きました。

中央を超えて、街の被害はみるみる無くなつて行きました。あつても極所に凹みや砕

けた、というより欠けた跡があるぐらいです。街自体も綺麗で、見かける人々も平和そうでした。

「不思議な街だ」

流夜がそんなことをまた呟きました。

そして、×印に向かいます。

着きました。そこは、村の中で一番大きな建物でした。荘厳で、というわけではないですが、立派な屋敷のようでした。

「すいませーん。旅の者なんですがー。」

大声で流夜が言うと、ドタドタと音がした後、青年が出てきました。青年は2人を確認すると、中に向かつて

「おじいちゃん、お客さーん。」と、叫んで、どうぞ、と。2人を招き入れました。

「ついてきてください」

2人は大人しく従います。

連れて行かれた場所は、大きな書齋でした。

机の向こうには、老人が1人いました。

「いんにちは。」

「こんにちは。」

流夜が挨拶すると、続けて射抜も合わせます。

「やあ、どうも。ようこそ、わしらの村へ。わしが村長じゃ。」

老人は穏やかに返してくれました。

案内してくれた青年は、ドアの横で静かに待っています。

「早速質問なんだけど、いい？入ったすぐのところと、この周辺の差なんだけど。」

「ああ、構わないよ。お主は、どこまで知ってる？」

『『コロシウム』については、門番に聞きいたよ。何が起きて、どう変わったのかも。不思議なのは、地図を半分超えてから、目立った跡がないことかな。向こう側は、明らかにボロボロだったのに」

「そうか、なるほど。…元々、あのシステムは国民全員が賛成というわけではなかったんじゃない。しかし国王に逆らえば殺されるのは歴然。仕方なく、わしらは端っこに集まって何も知らんふりをし続けることにした」

「まあ、そうだよ。…国王が殺された騒動の後は？」

「いい迷惑じゃよ。怯えることはなくなつたものの、いつこちらに飛び火が来るかわからなかったからの。事情を聞いたこっちは、すぐに関わらないことを発表した。おかげで大した被害は出なかったよ」

「ふうん、なるほど……ありがとうございます、だいたいわかった」

「だいたい理解した流夜は、一回だけ領くと、射抜の方を見ました。射抜は、視線に気づくと首を軽く振りました。」

「それで、今日合わせて三日間、滞在をお願いしたいんだけど、いいかな？」

それを確認した流夜は、村長に尋ねます

「何も無いところじゃが、構わんよ。宿なら、昔機能していた場所がある。そこを使うといい。利用する人はおらんから、金はいらんよ。ほれ、案内してやれ」

村長が話し終えると、青年が横に来て、「案内します」と言つて先に出ました。

「ありがとうございます」

短く、流夜が言います。

「着きました」

ついたのは地図でいうと中央の近く。二階建ての建物で、掃除されているようです

が、見た感じ明らかにボロボロです。もう機能していない、というのはやはり旅人が数年間いなくなつた、ということが伝わってきます。

「食事は、どうします？ここに、孤立した村になってしまい、満腹に食べられるような施設はないんですが。」

青年が尋ねます。

「いや、いいよ。一応携帯食料があるから」

流夜が断ると、青年は残念そうに「そうですか。」といい、小さく礼をして去って行きました。流夜の後ろで射抜が、「めちやくちやマズいけどな」と呟いたのを、流夜は無視します。

建物に入ると、一階は食事処になつていているようで、広い中にいくつかの机と椅子、それに奥にはもう古びたキッチンが見えます。二階に上がると、廊下が続いていて、ドアが並んでいます。開けてみると、どれも旅人が泊まる部屋のようにでした。2人はその中で、自分たちが来た門が見える部屋を選びました。窓を覗くと、被害の出方の違いがはつきりとわかりました。内装は思ったより広く、反面、何も置いてありませんでした。押入れに布団が詰められているだけです。

「で、明日の予定は？」

射抜が早速押入れにあった布団を引つ張り出すと、広げずにその上にどっかり座ると、流夜に目的を聞きました。

「とりあいず、この村は回らない。行くのはあつち。どっちかに接触しようかなって考えてる」

流夜はたつたまま窓を眺めて答えました。

射抜は疲れた顔で3度目のセリフを言います。

「お前マジかよ……」

そして朝。どうせ相手の動きを見逃すまいと見張りを交代で立ててるだろうと見込

みをつけ、早くから宿を出ました。護身用に謎の斧とハンド・パースエイダーを持っています。

「見つけた」

思ったより近くに、目的は見つかりました。

その男は2人に気づいて懐の剣に手を当てますが、相手が旅人だということに気がつくくと、警戒を続けたまま剣を離しました。

「何の用だ」

男は雑に言いました。

「旅の者なんだけど、話が聞きたくて。お前のサイドの偉い人に、会える？」

「ダメだ。今こちらは余裕がない。会わせることはできない」

即答されました。

「ダメか。あ、じゃあ、今どのくらいで戦線敷かれてるか、教えてくれない？それぐらいならお前でもわかるよね？」

男は嫌そうな顔をした後、敵のいる方を睨みつけて答えてくれました。

「ここの少し前だ。門のある場所よりこっち側のあの城壁にある大きな凹み。あれからそこにある四角い屋根の廃墟のラインだ」

2人がみると、それはかなり押されていて、ほとんどもう負けの状態に近いようだし

た。本部のありそうな大きな建物はもう直ぐ近くです。

「ありがとう。こっちは余裕が無くて負けそうなんだね」

流夜はありつたけの皮肉を込めてそういうと去って行きます。男はその言葉を聞くと、顔を青くした後、去っていく流夜を睨みつけました。

「お前あんなこととして大丈夫かよ」

さつき状況を聞いたサイドの反対の所に向かっています。少し走り、前線を越えた来たところで歩きに変えました。

「大丈夫だよ、あんな角つこのところ、あいつ以外に人なんかいないよ。だけど変だね。前線を越えたのに、相手は見えないよ？」

さつきの男がいった場所を通り過ぎてしばらく歩きましたが、人の気配が全くしません。

さらに歩くと、2人は異変に気づきました。

「流夜」。

「うん、わかつてる」

2人は人の気配に気がつきました。まず1人。しばらく待つてみましたが、動く様子がないので少し進むと、一気に気配が増えたのです。もはや、囲まれてました。

それでも一歩進もうとすると、

「そこのお前ら、止まれ！さもなくて殺すぞ！」

なにやら穏やかでない声が聞こえ、人がわらわら姿を現しました。声のする方向、建物の上を見上げると、ボロボロの鉢巻をした男が立っていました。

「お前ら、見かけない顔だな！平和ボケした村の者が、忌々しき鳥の者か、答えろ！」

ピリピリと空気が張り詰めています。そんな中で流夜は、

「あ、旅の者で、でちよっとお話が聞きたくて来たんだけど、お偉いさんに会えるかな？それとも、お前がこつちを取り仕切ってる人？」

なんとも場違いなほどに、穏やかな声で言いつて、

一瞬時が止まりました。

次の瞬間、周りを囲んでいた人たちがいきなり襲いかかってきました。全員剣を握っています。しかし、2人は冷静でした。

流夜は二丁のハンド・パースエイダーを引き抜き、最初に襲いかかってくる人を2人、劍の刃に当てました。相手は、衝撃に振動する自分の劍に怯み、立ち止まって劍を落とします。その後ろにいた後続は、勢いを殺せずにバタバタとぶつかり、その場にこけました。

射抜はまず1人目が劍を振りかぶったところにあえて近づき、劍を持った相手の手を掴むと、そのまま横に向け、さらにタックルをかまして劍を奪い取りました。そしてもう1人切り掛かってきたのを一瞬だけ刃で受け止めた後、上に弾き、腹を蹴って他に近づいてきた人に飛ばします。

そこで流夜と合流し、背を向けあつて、敵を睨みます。流夜はハンド・パースエイダーをしまい、背負っていた謎の斧を片手で振ると、見事に変形して大劍のようになりました。

さすがに相手も只者じゃないことに気づき、攻めてこなくなります。

「やめやめ、ストツプ！」

その後、そんな号令がかかると、周りにいた取り巻きたちは劍をすぐに劍をしまいました。

号令をかけたのは鉢巻をつけていた彼で、やはりこつちの派閥のリーダーのようです。

いつの間にか降りてきたようでした。

「降りてくる頃には始末してると思ったが、まさかそこまで強いとはな。話を聞きたいと言っていたな？ ついてこい」

鉢巻の男はそういうと歩き始めました。取り巻きたちはそれぞれ顔を見合わせた後、すぐにばらばらに去って行きました。

「ありがとう。助かったよ」

ついていきながら流夜は話しかけます。

「助かったのはこっちだ。あれだけの人数を相手に、1人も殺さないなんて手加減、なかなかできんぞ」

男は困った顔で言います。

「おや、その言い方、この争いにあんまり乗り気じゃないの？」

「それも含めて、向こうで話そう」

ついたのは大きな建物で、4階までありました。上に上がる途中、どの階でも楽しそうな風景が垣間見えました。

四回に着くと、屋内なのに薄いカーテンがかけられていました。中に入ると、長椅子だけ置いてあり、鉢巻の男がすでに座っていました。

「それで、なんの話から聞きたい？」

男は流夜と射抜が来たのを見ると、そんなことを言いました。

「不思議に思ったことは2つ。1つ目は、お前自身。この争いについて、どう思っているの？」

その言葉を聞いて、男は神妙な顔をし、静かに語り始めました。

「∴最初は、俺たちが王になると、張り切ってたさ」

「たち？」

「俺と他に、親友が2人いたのさ。途中までは仲良くやってた。だけど、2人とも∴途中で死んじまったのさ。バカだったよ。敵が不特定の中別行動なんてするべきじゃなかった。それから、考えが変わったよ。犠牲者をなるべく出さないように頑張った。頑張って、ここまでできた。後少しなんだ。後少し∴」

「親友が死んで、戦意は失わずに村に行かなかつたんだ」

語尾がかすれた瞬間、流夜はそんなことを言いました。それを聞いた男は、バツが悪そうに、

「あいつらと一緒に戦ってきたんだ。集まってくれた奴らもいるのに、そこで俺が止めたら、顔向けできない」

小さく言いました。

「わかつたよ。悪かつた。それで、2つ目なんだけど、前線つて、どこだと認識してる？」
流夜はすぐに言葉が続けると、地図を男に差し出した。

「前線なら…大体この辺だな」

男は地図を手にとると、門より手前側、つまりさつき見張りに聞いた線より門を対象に反対側を示しました。

前線の情報が食い違っている。

流夜は「やっぱりか…」と呟くと、男に事情を説明しました。

「なに？それは本当か？ありがたい情報だ、感謝する。あーつと、俺はラッド、お前らは？」

男は表情を輝かせ、今更な自己紹介をしながら手を出してきました。

「俺は流夜、こっちは射抜。まあ、明日ここを出るからあんまり覚えなくていいよ」

流夜は手を握り返しました。

「そうか、残念だ。…お前は変な奴だな」

ラッドは、握手をした後再び椅子に座りました。

流夜は以前立ったままです。文句は無いようですが。

「よく言われるよ」

「お前らは強いが、どこでそんな強さを手に入れたんだ？はつきり言つて、お前らならこの争いを止めさせることぐらい容易なほどだぞ。」

「買いかぶりすぎだよ。それに、俺たちは旅人だからね。いろんな場所に行つていろんな世界を見る。使命がなければ、干渉することはないよ」

流夜は軽く肩をすくめます。

「そうか、残念だ。仲間になつてくれたら心強いが。…この後は向こうに行くのか？」

「いや、向こうには会えなさそうだからね。もう帰るよ。射拔が暇そうだし」

「そうか、じゃな」

そうしてラッドは軽く手を振りました。流夜も射拔も手を振つてから出ようとしませんが、流夜が思い出したように首だけカーテンから覗かせてきました。

「そうそう、一つ忠告しておくよ。明日、お前の派閥は動かさないほうがいいよ。動かすしかないとしたら、逃げさせて。脅威が去ったら、一気に攻めてみてね。」

さて、何のことでしょう。

「あくあ、何のための争いだっただのかねえ。」

宿に戻る道中、射抜が気怠げにため息とともに呟いた。

「最初は自分のためだろうね。それから、ラッドは他の何かに気がつけた。もう片方は、そのまま、かもしれないね」

流夜にとつて明確に、射抜にとつては漠然と、何となく、結果は見えていました。

2日目は、このまま宿に戻って過ごしました。

しかし何も無いというわけではありませんでした。夜、2人は何者かの気配を感じて起き上がりました。

素早く意識を覚醒させて、ハンド・パスエイダーのセーフティを解除し、手を置きます。そしてドアの方に意識を向けていると、ドアがバァン！と勢いよく開き、外から剣を携えた男が入ってきました。

すかさず射抜が前に出て、昼間にやったように、突撃してきた相手の剣を避けて手を掴むと、そのままタックルして相手を吹き飛ばしました。

相手の顔を見ると、それは知っている顔でした。

「おや、お前って昼間の見張りをしてた人じゃん。どうしたの？」

「どうせ情報を向こうにバラしたんだろ。その責任を取るために、お前たちを殺しに来た。…失敗したけどな」

男は座ったまま壁に力なく寄りかかって座った。

「昼にも思ってたけど、お前ってあんまり今の状況を気に入ってないね。消耗するのに疲れたの？」

「…そんなことはいいだろ。殺せよ」

「…お前の敵は、今の状況を憂いている。お前がこの争いを止めたいのなら、そっちに行くといい。あっちは、居心地は良かった」

口を開いたのは、射抜でした。

「そんなことを言っただうする」

「お前を殺したら部屋が汚れる。出てけ」

短くいうと、見張りだった男は自虐的な笑みを浮かべると、部屋を出ようとしています。

「自殺もするなよ。目覚めが悪くなる」

「しねえよ」

射抜が付け加えると、男はすぐに答えて部屋を出ました。

そして朝がきました。小さな窓から、浅い光が差し込んでくるのが見えます。2人はハンド・パスエイダーの動作の確認、少ない荷物の確認をすると、すぐに外に出ました。

そして、まず、中央に向かいました。

「やっぱりね」

なんの感情もつけずに、流夜の三度目のセリフを吐きます。

中央に向かうと、村の人が集まっています。それも全員剣や弓を手にして。そして、1人の青年が前に出てきました。初日に村長のところに、そしてそのあとに宿に案内してくれた人です。彼は穏やかな顔で話しかけてきました。

「どうも、お疲れ様でした」

「ありがとう、お世辞にもいい国とは言えないけど、まあまあ楽しかったよ。それで？この大人数は見送りなの？嬉しいなあ」

流夜は前半だけ比較的素直な感想を言いました。

それを聞いた青年は、表情を変えずに告げます。

「それは何よりです。ですが、あなたは2つの派閥に接触しましたね？『コロシウム』の時もそうでした。旅人が何かをしてくだしたせいで、我々が苦しむ羽目になったんです。見過ごすわけにはいかないんですよ」

「なるほど。それで、旅人が来る度に殺してるわけだ。毒で、寝てるところに奇襲して、コロシアムの人間と手を組んでも」

流夜が言い終えたところで、後ろで人の気配が増えたことに気がつきました。村の人たちとは風貌も何もかもが違う、争っている人です。

料理を受け取るようなら、毒で。コロシアムの騒動の人にそそのかして、宿の場所を

教え、奇襲させる。それでも生きてるようなら、今ここで。

「ねえ射抜、もう、使っちゃっていいよ。ラッドには忠告したし、ここはダメだ。つまらない。俺も使うよ」

ジリジリと寄ってくる中、流夜は射抜に語りかけました。

一体、何を意味してるんでしょうか？

「本当に、いいんだな？」

射抜が尋ね、流夜が返事をする前に、一斉にこの国の人が飛びかかってきました。そして、一瞬で全員が死んだのです。

射抜は、どこから出したのか、禍々しく発光する剣を振るい、襲い来る全てに刃を向けています。その様は、まるで嵐の様。ある程度剣に通じている者から見れば無駄な動きは少ないものの見れるでしょう。しかし、射抜は疾さを持つて、その無駄をねじ伏せていました。相手の剣を弾くと同時に斬り、さらに通る道の上にいる者に斬りかかる。剣を構えてなければ、構える暇もなく斬られ、構えていれば、なす術なく殺される。

流夜は、まずハンド・パースエイダーを二丁引き抜き、2人の頭を撃ち抜きました。そして、右手にあったリボルバーを投げ、敵にぶつけ、左手のオートマチックのバーストで怯んだところを撃ち抜き、空いた右手は大剣を取り、次に来た相手を容赦なく斬り捨てます。そして、不思議なことに、流夜の周りにいた数人が、地面から突き出た棘の様

な岩に貫かれてました。吹き飛ばされたところにたまたまあったのか、あるいは。

弓を持った人間もいましたが、仲間も入り混じった混濁した中を狙うのは至難の技です。さらに、相手は2人とも絶えず動き続けています。弓はただ見るだけしかできません。

そうして2人はその言葉の通り人ごみをかき分け、門への道が見えると、一直線に走りました。追いかける者など、いません。2人は重い荷物を、ましてや片方は大剣などを持つています。追いつくのは簡単でしょうが、周りに転がっているのです。彼らの記した凄惨な跡が。もはや誰も関わろうとしなくなっていました。

さらに遠くから1人、その光景を見てるものがありました。昨日の昼に、忠告を受けた人です。村人に協力を要請されて受けましたが、向かわせた部下に集まった人の外側に位置させ、2人には近づかない様に命令した人です。

「ハハ、買いかぶりすぎだつて？ おかしいだろ、それは。それ以上だ、まるで上限が無いぐらいだ。脅威つてのは、脅威つてのは……」

その男は、自嘲気味に呟きました。

「門番さーん！ただいまー！」

関所に入ると、流夜が一番に元気な声をあげました。

しかし、門番は2人の姿を見るなり顔を青ざめました。

それもそのはず、2人は返り血で真っ赤です。

「お前ら……一体何をしたんだ？まさか争いを止めたのか？」

「まつさかー。俺たちは、俺たちの身を守っただけだよ。あ、でも、多分もうすぐ争いは無くなるから、安心してね。じゃーね」

門番は最後まで顔色を変えませんでした。なにかとんでもないものを目にした様な驚いた表情は、2人が去った後も続いてました。